

どうもこんにちは、そろそろ秋の気配がしてきました今日この頃皆様いかがお過ごしでしょうか？今回のコラムも面白い内容になっております。
坂井先生の話はいつも忘れかけてた当たり前の根本みたいなものを思い出させてくれます。「こんな事が出来るようになる為に頑張ろう」な支援ではなく、「この子が将来こんな風に暮らせたら良いなあ〜」な支援なのです。その中で「予想を上回る伸び」が起こる。この伸びも支援者側の「アンテナ」が成長していないと見逃してしまったり、「ここじゃないねん！」になる。子ども達と共に成長していきたいですね。 久田

第26回 『わかるように伝えていますか』

香川大学 坂井 聡

☆子ども達の育ちに希望を持つ

子どもの育ちに希望をもつことはとても大切なことです。目の前にいて関わる子どもが、どんな子どもに育っていけばよいのかを考え、少しずつ、それに向かって指導を繰り返していくことができるのはそのためです。学校では、個別の指導計画などに記載された目標に向かって、同僚や家族等と共働して指導を進めていくということになるのではないかと思います。ここで共働と表現したのは、じっとして動かなければ前に進むことができないと考えるからです。共に動くことで、進むべき方向が見えてくるのではないかと思います。

私は、特別支援学校という現場に約20年勤めておりましたが、この20年ほどの教師経験のなかで、初めて音声で話し始めた児童や生徒に出会ったことが三回あります。いずれの児童、生徒にもコミュニケーションエイドを使ってコミュニケーション指導をしていたのですが、ある日突然「先生」と呼ばれたことがあるのです。いずれの児童、生徒もそれまでは、音声表出によるコミュニケーションをとることができなかったもので、そのときは、とてもびっくりし、本当なのかどうなのかわかりませんでした。

これまで、話をしなかった子どもから、初めてしゃべりかけられたのです。そんなときはとても興奮するもので、何があったのかと冷静に考えることができるようになるまでに、少し時間がかかったのを今でも憶えています。

このような感動を覚えた経験をしているのですが、実は私は、この児童、生徒に対して、「音声表出でコミュニケーションできるようになる」ということを目標にしていたではありませんでした。

音声表出できるようになることを期待してコミュニケーション指導をしていたのではなかったという事です。彼ら、彼女らから音声が出てくるといようなことは、考えてもみななかったからです。ただただ、色々な手段を使って自分の意思を伝えることができるようになればよいと考えて、その方法の一つとしてコミュニケーションエイドを使って指導していたということなのです。

時に子どもたちは私たち関わる側の予想を裏切るような伸びを見せるものです。こちらが期待していた以上の結果を見せてくれることも多いということなのです。私たちの予想を遥かに超えて、この伸びを見たとき、この瞬間が、「この人たちと共に関わり、ともに生きてきてよかったな」と感じる時ではないかと思うのです。このような瞬間には何度でも出会いたいものだと思います。このような瞬間に出会うチャンスが、人と関わっていたら誰にでもあるのです。いろいろな人に関わることができてよかったなと思うと同時に、人の力とは本当にすごいものだと感じる瞬間でもあると思うのです。

ちょっと伸びが見られたら喜ぼうではありませんか。その積み重ねが実は、私たちの成長の糧でもあると思うのですが、いかがでしょうか。

坂井聡先生のご紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞

(著書)

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里） クラブルームコミュニケーション（こころリース出版会） 自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンバワメント研究所）など